シンプルで温かく

和田誠さんを悼む

三浦 衛

「和田誠さんが亡くなりました」。若い女性編集者が声を上げた。ふだん黙々と仕事をする彼女の声のトーンから驚きが伝わってきた。昨年から体調を崩し自宅療養をしていたらしい。私は直接お会いしたことはない。しかし、この9月で20周年をむかえた弊社にとって、和田さんは欠かすことができない存在だった。

はじめて和田さんにお願いした仕事は「面白南極料理人」の装丁だった。会社を立ち上げて2年目の2001年。著者の西村淳さんは、南極越冬隊の料理担当として観測隊に参加。その手記が縁あって弊社に舞い込んだ。

さっそく目を通す。ごみを出せない南極で、手を替え品を替えてのアレンジ、工夫がすこぶるおもしろい。ただタイトルがぴんと来ない。いくつか案を考えたが、面白南極料理人という言葉が口をついて出た。おもしろ、なんきょく、りょうりにん。語呂もいい。弾(はず)んでいる。著者のそこはかとない温かさとユーモアをどう表現するか。よし！シンプル・イズ・ベスト。このあたりで私は本の装丁を、和田誠さんにぜひお願いしたいと思った。

実際の交渉は編集担当のYが行った。和田さんが引き受けてくれたと知らされ、本ができていないのに、できたも同然の気持ち、まさに天にも昇る気分に浸った。調子づいた私は、推薦文を和田さんの奥様で料理愛好家の平野レミさんにお願いすることにした。

予定の日にYが和田さんの事務所を訪ね、お願いしていた装丁カンプ（原案）をいただいてきた。トレーシングペーパーがかけられた本のジャケットを見、その静かなインパクトに目を見張った。

青空の下、一面、真っ白な氷。割れた氷の塊の上にひげづらの西村さんがフライパンとしゃもじを持ち直立不動の姿勢で立っている。だれが見ても、どこから見ても西村さんだ。右上に「面白南極料理人」の文字。罫線でふち取られた縦枠の中は目の覚めるような赤。手書きの文字は白抜きだ。

なんとシンプル！　和田さん独特の線と色。平野レミさんからは、「寒そー。だけど、おいしそー。」の推薦文を頂戴した。そう。和田さんの線と色も美味しそうなのだ。料理でいったらシンプルこの上ない、例えば新米による塩むすびだろうか。よだれがでてくる。しかし、第一級の米がたゆまぬ作業の結果であるように、和田さんのシンプルな線と色は、経験を踏まえた迷いのないものであることがその仕事ぶりからうかがえた。

よちよち歩きの出版社が風に乗った瞬間の話。これで針路が定まったと思った。この本はその後、新潮文庫に入り、堺雅人主演で映画になった。

和田さんが装丁、レイアウトを手掛けた写真集「九十九里浜」

写真集の装丁と中のレイアウトを含めて和田さんにお願いしたものもある。写真集「九十九里浜」。撮影したのは、木村伊兵衛に九十九里ならこのひとと言わしめた小関与四郎さん。スタジオを訪ね、写真の迫力に圧倒された。昭和30年代、40年代の漁師、それを手伝うオッペシと呼ばれる半裸の女性たち。

弊社はそれまで写真集を出したことはなかった。個人的にも写真に詳しいわけではない。しかし、大判の写真を一枚一枚めくっていくうちに、自分の胸の内に滾(たぎ)ってくるものがあった。

写真集をつくる前に、いくつか代表的な写真をコピーして推薦文をお願いした。安西水丸、石牟礼道子、加藤郁乎、木田元、佐々木幹郎、椎名誠、地井武男、中尾彬、山田太一、木下順二、谷川俊太郎、藤本義一、山折哲雄などの各氏からありがたい言葉をいただいた。映画監督の新藤兼人さんからは「ありのまま」の題で詩を頂戴した。

装丁とレイアウトをお願いし引き受けてもらった和田さんからも推薦の言葉をいただいた。「男も女も若者も老人も、同じたくましさでせいいっぱいに生きている。その人間性の迫力に感動します。彼らのナマの姿と格闘する写真家の根性にも。そういう強さを、デザインの上でも出したいと思いました」。「九十九里浜」の文字は和田さん創作のもの。箱にあしらった写真も和田さんが選んでくださった。本体1万5千円の高額の写真集ながら、数年で売り切れた。

自分だけでする仕事はつまらない。ひとといっしょにする仕事は、困難も伴うけれど、それを突破し、ものが生まれる瞬間に立ち会い、ものづくりに参画できることがうれしく、ありがたい。そういうことも、言葉によらず、和田さんとの仕事を通じて教えてもらった気がする。

弊社の創業20周年を記念して小冊子「春風と野(や)」の準備をしているとき、これまでの感謝の気持ちを伝えつつ和田さんにはぜひ原稿をお願いしたいと思ったが、新しい仕事を極力受けないようにしているということを耳にしていたから、負担をかけては申し訳ないと思い、依頼を控えた。

とまれ、おかげさまで今月、21年目に船出することができました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

★

和田さんは10月7日死去、83歳。

みうら・まもる　1957年井川町生まれ。出版社「春風社」社長。著書に「父のふるさと　秋田往来」、詩集「カメレオン」など。横浜市住。

インタビューに答える和田誠さん（上から２番目）＝2007年10月、東京都渋谷区＝と、和田さんが装丁を手掛けた本の表紙